

裏目に出た、新しもの好きの伝統

貧乏の洗練は日本の文化

満腹のところへどんどん馳走が押し寄せてくる。おいしく感じられるわけもない。しかし次から次へとモノは作られ売られる。作る側も買う側も、お互いに幸福になれない仕組みが、そこにあった。日本人の暮らしを見つめてきた小泉和子さんに聞いた。

昭和のくらし博物館館長

小泉和子

●こいずみ・かずこ 1933年東京都生まれ。生活史研究所主宰。家具道具室内史学会会長。工学博士。父が昭和26年に建てた自宅を「昭和のくらし博物館」として公開。著書に『ちゃぶ台の昭和』『和食の力』『銀座育ち』など。

人と人とのつながりの裏側

今回の震災とそれに続く原発事故をきっかけに、便利で快適であることをひたすら求め続けてきたこれまでの暮らし方を見つめ直す、という機運が全国的に高まってきたように感じます。地域社会の重要性や人間同士のつながりの大切さを改めて

思い知らされた人も少なくないことでしょう。

焼け跡から復興した戦後の東京の姿と重なるせいでしょうか、私たちの「昭和のくらし博物館」（東京都大田区南久が原）へもさまざまな問い合わせが寄せられるようになりました。そんな中でよく聞かえてくるのが、「あの頃は人と人とのつながりがあった」という、昔を懐かしむ声です。

ます。

たとえば、当時はホテルの数もまだ少なかったので、親戚や知人がやってくるたびに、家に泊めるのが当たり前でした。

でも最近はそのようなことがなくなりました。先日新聞に、夫の両親が訪ねてくるのでホテルを予約したのに、お金がもつたいないと両親にキャンセルさせられて、わざわざ布団を借りて狭い自宅に泊める羽目になったと、憤慨する妻からの投書が載っていました。いまはこのように人を家に泊めるのをすごく嫌がるようになりましたね。

電話がまだ普及していなかった当時、呼び出してもらうためには、電話のあるお宅と日頃から仲良くしておかねばなりませんでしたし、相手の迷惑にならないよう、時間帯を見計らったり、要件を手早く済ませる

ようにも気を遣いました。

お風呂にしても内風呂ではなくて銭湯でしたから、ばしゃばしゃお湯を無駄に流したりすると怒られたものです。

そういうご近所の目をはじめとした、社会生活を営むうえで欠かせない人間関係を、面倒くさいから、煩雑だからと、高度成長期以降の日本人は敬遠するようになりました。いまの人は面倒くさいことはしない、自分が嫌なことはしないと、嫌なことを身の回りから消していった結果、人間同士のつながりが希薄になってしまったのです。

人間の幸せとは、人と人、社会と人とのつながりがしっかりと保たれていてこそ、実感できるものです。私たちはそれを壊して、つながりをなくす方向へとどんどんきってしまつた。こういう社会のあり方は、よく

ないのではないかと私は思います。

『裸の島』に見る人間の幸せ

このところNHKが「山田洋次監督が選んだ日本の名作百本・家族編」と題して、日本映画の名作を放映していますが、先日は新藤兼人監督の『裸の島』を観ました。

瀬戸内海の孤島に夫婦と子供二人の家族が住んでいて、生活用水も農作物にやる水も、舟で運んでこなければなりません。重い桶をかついで段々畑をひたすら登り下りして、イモ畑に水をまくのです。当然ガスや電気もありません。食事も粗末なものさつと食べるだけ。いまの時代では考えられないような、原始的で貧しい暮らしです。

その中で、子供が釣った鯛を遠い町まで売りに行くシーンがあるんで